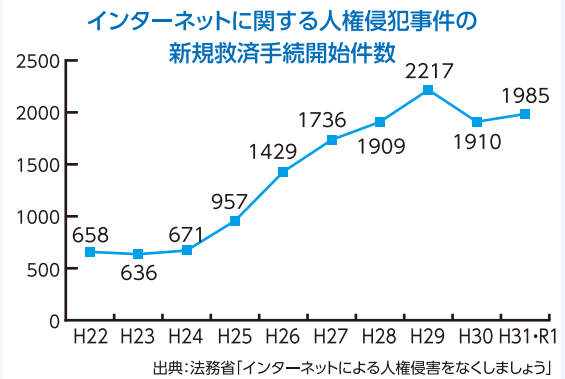


# 加害者にも被害者にもならないためには

SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)は、思ったことを気軽に投稿したり、意見に共感してもらったりして、見知らぬ人とのコミュニケーションの輪を広げてくれます。また、災害時に情報を発信・収集する際も大きな役割を果たしています。その一方で、SNSは、不確かな情報、個人のプライバシー流出、他人への誹謗中傷などを広げてしまう危険性をはらんでいます。SNSでの誹謗中傷によって、一人の人間を死に追い込んでしまうなど凶器になることさえあるのです(※)。

今回は、SNSの特性を踏まえながら、なぜ誹謗中傷をしてしまうのか。自分が被害にあったらどうすればいいのかなどについて、大阪大学大学院人間科学研究科准教授の辻大介さんにお話を伺いました。

※大阪府の取組(P.7)に大阪府と大阪大学人間科学部との共同研究について記載しています。



## オンラインの特性を理解しておくことが大切

大阪大学大学院人間科学研究科准教授 辻大介さん

### ▶ ネット上の誹謗中傷はいつから?

SNSで誹謗中傷が行われるようになったのは、「mixi」(2004年開始)が登場した2000年代のはじめ頃ではないでしょうか。mixiは、「友達承認」をすませた限られたメンバー内で会話し、投稿は実名でした。その後、人気を博したのが「Twitter」(2008年開始※日本語版)です。mixiと異なる最大の特徴は「匿名性」。Twitterは、自分が誰であることを示さずに投稿できます。さらに、見知らぬユーザー同士で膨大な数のフォローがあり、誰かが個人に対する誹謗中傷をつぶやけば、「リツイート」機能(他人の投稿を引用して再投稿)によって、またたく間にしかも、大規模に拡散されてしまう可能性があります。

誹謗中傷の行為自体は、人類史上、延々と続いてきました。それがIT技術の進歩によって、誰もが気軽にインターネットへアクセスできる環境が整い、誹謗中傷もそこに持ち越されたというのが実態だと思います。

### ▶ オンラインで態度が変わる?

オンラインでのコミュニケーションは、対面でのコミュニケーションよりも、トラブルが生じやすいことが実験研究でも明らかになっています。リアルな場では決して言わないことでも、オンラインでは「言ってもいい」と思



る錯覚が生じます。このように、インターネット上の対話で社会のルールや規範を無視し、実生活では、かかるはずの抑制がネット上で効かなくなることを「オンライン脱抑制」(Online disinhibition effect)と言います。オンライン脱抑制を引き起こす主な原因は、身元を隠せる「匿名性」や誰からも見られず、相手の顔も見えないという「不可視性」にあります。

誹謗中傷をする人の多くは、正義感からくるものです。例えば、新型コロナウイルス感染防止において政府が外出自粛を要請すると、オンライン脱抑制が効いてい